

# 松留館跡

(仮称) 上野原松留宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

上野原市教育委員会

## 序

本書は、平成21年、（仮称）上野原松留宅地開発に伴って実施した松留館跡の発掘調査報告書です。

このたびの発掘調査は、地域開発と文化財保護との調整を図り、埋蔵文化財を記録保存して後世に末永く伝えることを目的に実施しました。

調査の結果、おびただしい数の縄文式土器や、古墳時代から奈良時代にかけての壺や皿などの生活用品が発見され、これまで知られていなかった松留地区の歴史を知る上で予想外の成果をあげることができました。また、発見された巨大な岩は、先人たちが暮らした生活の中で一際目を引く存在として、この地の土地利用に少なからず影響を与えたことが想定されるところです。

本書が歴史の証として多くの方々に活用され、埋蔵文化財や郷土史への理解が深まることを願ってやみません。

最後に、調査にあたって終始ご協力いただいた井口建設株式会社、並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年12月

上野原市教育委員会

教育長 大神田 光司

## 例　言

1. 本書は山梨県上野原市松留字社寺原で実施された松留館跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は（仮称）上野原松留宅地開発に伴う事前調査として平成21年度に実施された。
3. 発掘調査は上野原市教育委員会が実施した。調査組織はつぎのとおりである。  
事務局 大神田光司（教育長）、小佐野進（教育学習課長）、久島茂夫（社会教育担当リーダー）  
担当者 小西直樹（社会教育担当）  
参加者 飯島勝巳、岡田錦三、加藤文宣、滝森季博、山口俊夫、飯島弘子、古根村典子、宮岡ます美
4. 本書の執筆・編集は小西直樹が行った。
5. 本書にかかる出土品・記録図面等は、一括して上野原市教育委員会が保管している。

## 凡　例

1. 本書に転載した地図はつぎのとおり。  
周辺の遺跡分布図：国土地理院発行の2万5千分の1地形図  
遺跡位置図：昭和63年国土地理院の承認を受けて調整した2千5百分の1地形図
2. 図版  
(1) 遺物の縮尺は1/3を基本とし、図版スケールに明記した。  
(2) 試掘調査説明図の土層断面は模式図を示した。  
(3) 色調の判別には「新版標準土色帖」（日本色彩研究所色票監修1988）を利用した。

## 目　次

序　例言　凡例	
第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の環境	1
第1節　遺跡の位置	1
第2節　周辺の遺跡	1
第Ⅱ章　調査の概要	4
第1節　調査に至る経緯と経過	4
第2節　調査の方法	4
第3節　遺跡の層序	4
第Ⅲ章　調査の成果	7
第1節　縄文時代	7
(1) 配石	7
(2) 土器	7
(3) 石器	8
第2節　古代	13
第3節　巨石	14
第Ⅳ章　まとめ	14

## 挿図目次

第1図　周辺の遺跡分布図	2
第2図　松留館跡の位置図	3
第3図　試掘調査説明図	5
第4図　調査区全体図	6
第5図　出土土器（1）	9
第6図　出土土器（2）	10
第7図　出土土器（3）	11
第8図　出土土器（4）	12
第9図　出土石器	12
第10図　出土土器	13

## 図版目次

図版1　遺跡遠景、調査前	
図版2　調査地近景、配石	
図版3　巨石近景、調査風景	
図版4　出土遺物	

## 第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境

### 第1節 遺跡の位置

松留館跡は山梨県上野原市松留に位置する。上野原市は山梨県東境の山間地にあり、東京都・神奈川県と接している。市域は近世以降に甲州街道の宿場町として発展し、市内を流れる桂川（相模川）の水運とともに東西交通や物資流通の要衝であった。桂川は市の中央部で鶴川と合流するが、この付近は両岸に河岸段丘地形が広範囲に発達し、市街地が形成されている。この合流点西側の低位段丘上に本遺跡が位置する。

松留館跡は国道20号松留橋の南東の正法寺一帯にあったと伝えられ、文化11年（1814）編纂の『甲斐国志』に「何人の古跡なることを知らず」と記される。現在も土塁や堀の一部が残り、境内から北側のJR中央線までの間（130×90m）に二郭の存在が推測されている<sup>1)</sup>。館の造営者や年代は不明である。

今回の調査地は松留館跡北方の河岸段丘縁辺部にあたり、JR中央線と県道新田松留線の間に計画された宅地予定地である。一帯は平坦地が3段に連なり、このうち発掘調査地点は最下段に位置する。付近の標高は190mである。周辺は休耕山や畑の中に民家やアパートが点在する。

（1）1980[山梨県]『日本城郭人系』第8巻 新人物往来社

### 第2節 周辺の遺跡

松留地区では他に松留遺跡がある。松留遺跡は河岸段丘背後の丘陵状高台に位置し、堀之内1式土器や石棒が採取されている。

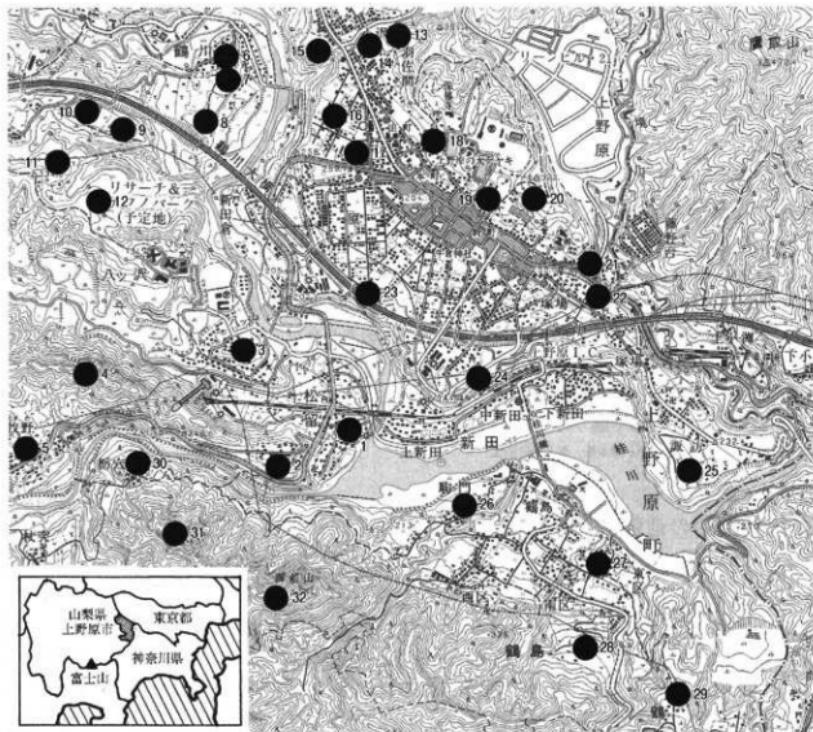
周辺では多数の遺跡がある。縄文時代の遺跡は高・中位段丘面や丘陵斜面地に多く、上野原地区では大堀II遺跡（14）や関山遺跡（24）で中期中葉・後葉の堅穴住居、上野原小学校遺跡（18）で中期から後期の遺物包含層、狐原遺跡（25）で中期後葉から末葉の堅穴・敷石住居からなる集落跡が調査された。鶴川の西側地域では、大門遺跡群（9～12）で早・前期の大規模な堅穴群や、中期の堅穴・敷石住居からなる集落跡が調査された。

弥生時代は、南大浜遺跡（10）で中期再葬墓の壺が単独で出土したが、この他の確認・調査事例は乏しい。

古墳時代以降は、上野原地区の人間々遺跡（17）や上野原小学校遺跡（18）で古墳時代後期を最古に奈良・平安時代の堅穴住居・掘立柱建物が多数調査され、このうち人間々遺跡では銅製帶金具が出土した。狐原遺跡（25）は古墳時代前期を最古に古墳時代後期から奈良・平安時代の堅穴住居・掘立柱建物が多数調査され、銅製飾り金具や鉄製鏡印など特異な遺物が出土した。古代律令下、山梨県東部（郡内地方）は甲斐国都留郡に編入され、桂川沿いに複数の郷が配置されたと考えられており<sup>1)</sup>、大門々遺跡や狐原遺跡など大規模集落の存在と併せて、上野原地区が桂川流域の主要な拠点地域だったことがうかがえる。

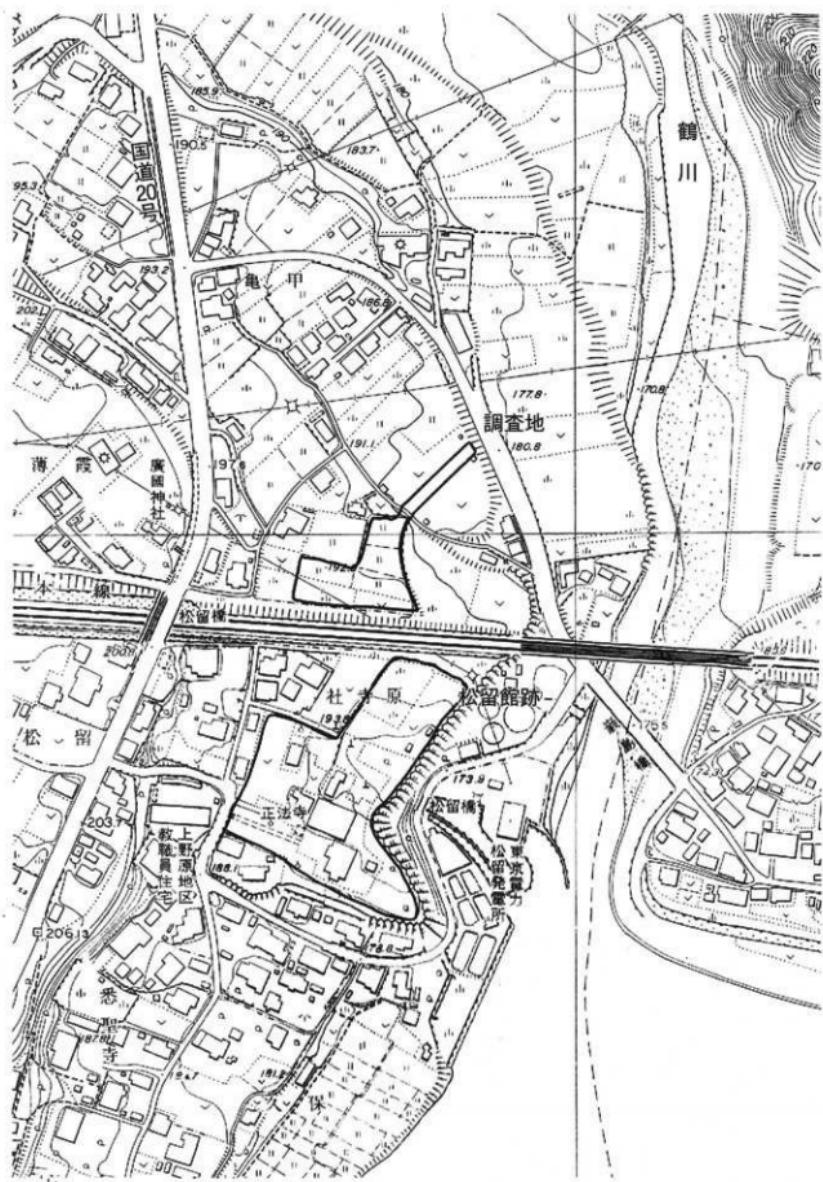
平安末期以降、内城館（23）は上野原地域の支配拠点として古郡氏、のち建磨3年（1213）から天正年間まで加藤氏の居館であったと伝えられる。桂川沿いの山稜には牧野砦（4）、柄穴御前（31）、鶴鳥御前（32）で堀や郭が確認されており、造営者や年代は不明だが内城館と一緒にして国境の守りを担っていたものと考えられている。

（1）上野原地区を含む鶴川東部地域を占める、鶴川西部及び桂川南部地域を都留郷（一説では大月方向）に比定する説がある。



- |                       |                              |
|-----------------------|------------------------------|
| 1 松留館跡 繩文、中世          | 17 大間々 繩文、古墳、奈良、平安           |
| 2 松留 繩文(後)            | 18 上野原小学校 繩文(早・中・後)、古墳、奈良、平安 |
| 3 ハッ沢 繩文(中)           | 19 新町 繩文(中)                  |
| 4 牧野藝術 中世             | 20 根本山 繩文(中・後)、平安            |
| 5 牧野 繩文、平安            | 21 桜ヶ丘 繩文、古墳、平安              |
| 6 上野山I 繩文(後)          | 22 塚場古墳群 古墳                  |
| 7 上野山古墳 古墳            | 23 内城館跡 中世                   |
| 8 上野山II 繩文(中・後)、弥生    | 24 関山 繩文(早・中)、平安             |
| 9 大浜 繩文(早・中・後)、平安     | 25 狐原 繩文(早~後)、弥生、古墳、奈良、平安    |
| 10 南大浜 繩文(中)、弥生       | 26 駒門 繩文(中)、弥生               |
| 11 大門I 繩文(早・中・後)、平安   | 27 東区 繩文(中)                  |
| 12 大門II 繩文(早・中)、平安    | 28 田代 繩文(中)                  |
| 13 大堀I 繩文(中)、平安       | 29 黒ノ木 繩文(中・後)、平安            |
| 14 大堀II 繩文(早・中)、古墳、平安 | 30 柄穴 繩文(中)                  |
| 15 新井 繩文(早・中)、平安      | 31 柄穴御前 中世                   |
| 16 寺畠 繩文(中)           | 32 鶴島御前 中世                   |

第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 松留館跡の位置図 (1/2,500)

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯と経過

平成21年5月、山梨県上野原市松留における宅地開発計画に関し、事業主の井口建設株式会社より上野原市教育委員会に埋蔵文化財の有無及び取扱いに関する事前相談があった。計画は県道からの取り付け道路と宅地8棟分等を造成するもので全体面積2,635m<sup>2</sup>であった。工事予定地は遺跡の該当地でなかったが、市開発行為指導要綱に基づき遺跡の有無を把握するため試掘調査を行なった。

試掘調査は6月1日～8日に行なった（第3図）。2m四方の試掘坑10箇所を人力で掘り下げたところ、計画地南側と取り付け道路予定地を中心に縄文土器等が出土した。とくに道路予定地で多数の縄文土器が出土し、その分布範囲を調べるために試掘坑を幅1m・長さ20mにわたって拡張した。

調査結果を踏まえ、松留館跡の範囲を工事計画地の全域に拡大する措置を取り、埋蔵文化財の取扱いについて関係者と協議を進めた。この結果、掘削工事のため保存が不可能な縄文土器の集中地点を発掘調査することになった。

- 6月16日 文化財保護法93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出
- 6月24日 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
- 7月9日 市教育委員会と事業主の間で埋蔵文化財の取扱いに関する協定書を締結
- 7月15日～31日 発掘調査
- 7月31日 上野原警察署に埋蔵物発見届、県教育委員会に保管証を提出
- 8月19日 埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）
- 出土品等の整理作業は10月から開始し、12月までに報告書の編集作業を終了した。

### 第2節 調査の方法

発掘調査は取り付け道路予定地内72m<sup>2</sup>で実施し、グリットラインは道路予定軸に沿った。表土を重機で掘削後、第Ⅱ層（遺物包含層）を人力で掘り下げ遺物遺構の確認・検出作業を行なった。遺物は5mグリット毎に一括して取り上げた。掘り下げは第Ⅲ層上面までに止めた。

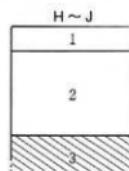
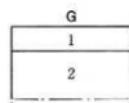
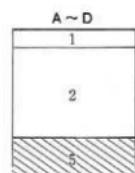
### 第3節 遺跡の層序

調査区で確認した基本的な層序は次のとおりである。地表は平坦だが、第Ⅱ層以下は東方に向かって緩やかに傾斜していた。段丘の基盤はローム層を欠き、大小様々な礫から構成される（1975上野原町誌）。

- 第Ⅰ層 暗褐色土 煙の耕作土。層厚約15cm。
- 第Ⅱ層 暗褐色土 粘性・繊りやや弱い。礫（3cm以下）やや多い。本層中位で縄文土器を多く含む。配石・巨石の確認層。層厚約60cm。
- 第Ⅲ層 黒褐色土 拳大以下の礫を多量に含む。層厚約20cm。
- 第Ⅳ層 黄褐色砂礫層

トレンチ	出土遺物・数量
A	縄文土器1、須恵器1
B	土師器5
C	縄文土器5
D	縄文土器1
E	なし
F	レンガ2、土師器2
G	縄文土器124
H	縄文土器7
I	縄文土器6、土師器1
J	縄文土器23

試掘調査出土遺物集計表



0 1m

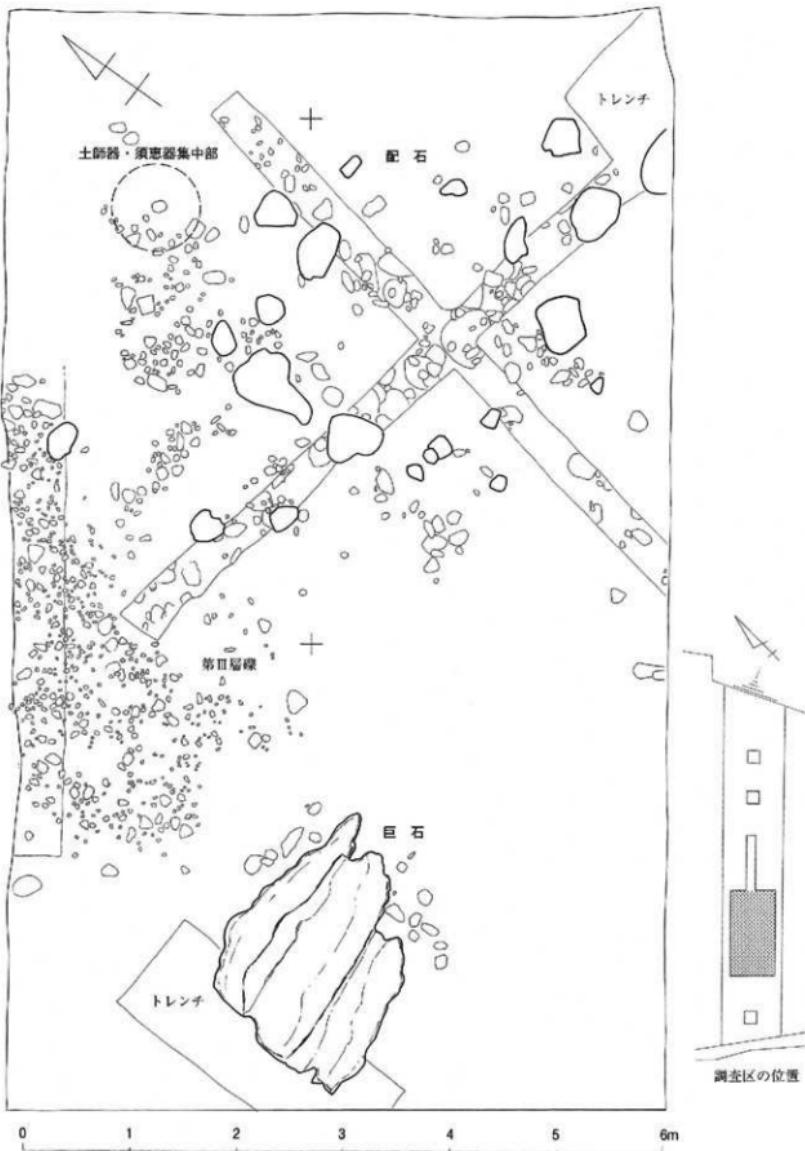
## A ~ F トレンチ土層

- 1 表 土 旧水田の耕作土。2層との間に鉛削色の硬質土層が薄く広がる。層厚約15cm。
- 2 暗褐色土 繊りが強いシルト質粘土。繊維の橙色スコリア（1mm以下）、白色粒子・金雲母（1mm以下）多い。拳大以下の礫を少暈含む。縄文土器・土師器が散発的に出土する。層厚約80cm。
- 3 暗褐色土 繙を多量に含む。レンガ片や度成した微細な上部器片がわずかに混入する。層厚約60cm。
- 4 暗褐色土 粘性・繊りやや強い。礫を多量に含む。橙色スコリア（2mm以下）、灰粒を少量含む。層厚80cm以上。
- 5 砂 砂層

## G ~ J トレンチ土層

- 1 表 土 煙の耕作土。所厚約15cm。
- 2 暗褐色土 粘性・繊りやや弱い。縄文土器を多量に含む。礫（3cm以下）やや多い。層厚約60cm。
- 3 砂 砂層

第3図 試掘調査説明図



第4図 調査区全体図

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 繩文時代

#### (1) 配石 (第4図、図版2)

試掘調査時に確認された。確認面は第Ⅱ層中である。東西5m、南北4mの範囲に大形の河原石が環状に分布し、直下の疊層(第Ⅲ層)に連続する。石の上面を意図的にそろえた様子はなく、石の分布は地形に沿って東方向に傾斜する。遺物は石の間から多量の縄文土器片が出土したが、周囲の土器分布と連続しており、配石に伴う遺物の判別は困難であった。配石は地山疊層の一部である可能性もあり、遺構とするにはためらうところもあったが、遺物包含層中に一定のまとまりをもって検出されたことから配石として報告する。

#### (2) 土器

縄文土器は前期・後期のものが出土し、とくに後期前半が主体を占めた。調査区全域の第Ⅱ層から出土し、とくに配石とその周辺に多い。すべて破片。調査区の出土総数676点、重量13.13kg。以下、主な土器を試掘で出土したものも含めて次のとおり分類し、報告する。

##### 第1群 前期の土器 (第5図1~9、図版4)

1~5は縄文施文で織維を含む。暗褐色・明褐色で焼成はやや悪い。前期黒浜式。2・4・5はCトレンチ出土。6・7は縄文施文で、7は半裁竹管による連続爪形文を伴う。暗褐色で焼成は良い。前期諸穢式。8・9は半裁竹管の施文で、8は円形刺突と弧線による肋骨文、9は円形刺突と連続爪形文による木葉状文と考えられる。黒雲母を多く含む。いずれもにぶい黄橙色で焼成は良い。前期諸穢式。

##### 第2群 後期の土器 (第5図10~第8図92、図版4)

###### 第1類 磨消縄文 (10)

沈線区画の磨消縄文で砂粒を多く含む。にぶい黄褐色で焼成は良い。称名寺I式。

###### 第2類 沈線文が主体となる深鉢 (11~34)

11~14は深鉢胴部に屈曲する沈線が施文され、このうち11は短沈線を伴う。にぶい黄褐色で焼成は良い。15~18は口縁上端が外削あるいは屈折する深鉢口縁部で、上端に1本から2本の太い沈線が巡り、縦・斜位の短沈線が伴う。内外面は良く磨かれる。橙色・赤褐色で焼成は良い。19~21は緩くくびれた深鉢胴部に縦位沈線が疎らに施文される。内外面は良く磨かれる。22~24は、わずかに張る胴部に2本ないし3本1組の縦位沈線を施文する。内外面は良く磨かれる。25・26は沈線が斜交する。27・28は太い沈線を縦方向に弧を描いて施文する。29~34は胴部に弧状や斜位の沈線文を配する。沈線文は2本ないし3本1組となるものが多い。このうち29~33は頸部が強くくびれ胴部が張る器形で、頸部に横位の沈線が施文される。以上のうち11~18は称名寺II式~堀之内式、その他は堀之内式期に比定される。

###### 第3類 条線文が主体となる深鉢 (35)

櫛齒状の条線が横位に施文され、砂粒・金雲母を多く含む。堀之内式と考えられる。

###### 第4類 縄文施文の深鉢 (36~42)

36は頸部が強くくびれ胴部が張る器形で、頸部から胴上部に刻みが入る細い降帶を巡らし、平行して沈線区画の帯縄文を配する。内外面は良く磨かれる。37~41は3本1組の沈線により縄文を区画するもので、37~39は胴部の張りが強い。42は張りのある胴部に沈線区画の帯縄文が配される。以上は堀之内式に比定される。

#### 第5類 列点施文の深鉢 (43)

頸部が強くくびれ胴部が張る器形と考えられ、胴部に沈線区画の列点が施文される。にぶい橙色。砂粒が多く、金雲母が目立つ。堀之内式に比定される。

#### 第6類 朝顔形深鉢 (44~67)

胴部から口縁部にかけて直線的に開く器形。口縁部は平線と小波状(48)があり、刻みの入った細い隆帯が1本ないし2本巡り、8字状貼付文を伴う。口縁下より胴部にかけて沈線区画の帶縄文を配すが、沈線区画内が無文となるもの(49)もわずかにある。内外面が良く磨かれることが多い。50~52は平行する沈線区画内に縄文を交互に施文し、縦位沈線が加わる。灰黄褐色で金雲母が目立つ。55~61は重層的な帶縄文が渦巻状ないし弧状に配される。にぶい赤褐色で焼成は良い。63は三角文。64・65は棹状区画内に弧文が配される。63~65はにぶい黄褐色で、焼成はやや悪い。66・67は幅広の帶縄文により棹状文が配される。このうち67は表面暗褐色、内面赤褐色。以上は堀之内式に比定される。

#### 第7類 上記土器群の口縁部 (68~71)

大きく開く器形で、上端に沈線や円形刺突が施文された口縁部を一括した。68は短く屈折する口縁上端に沈線を巡らし、内外面に竹管状工具による円形刺突文が加えられる。69は小波状口縁の上端内面に1本の沈線を巡らす。70は波状口縁で、波頂部内面の突起を中心に弧状の沈線を重ねる。

#### 第8類 注口土器 (72~81)

72~74は注口土器の把手と考えられる。73は橋状把手の頂部が円環状となる。74は円環状把手の頂部と側面に8字状貼付文が加えられる。砂粒が多い。75・76は体部上半に沈線区画の帶縄文が配される。77は体部上半に3本1組の細い沈線を弧状に施文し、一部は絡み合う。外面は良く磨かれる。78は細かな条線文を弧状に配し、底部に網代痕が残る。外面は良く磨かれる。79は体部上半に細い隆帯が巡る。80は注口部で、外面は良く磨かれる。色調は72・73にぶい黄褐色、79外面橙色の他は概ね内外面とも黒褐色が多い。いずれも堀之内式に比定される。

81は有頭の注口土器と考えられ、口頭部に把手が付く。把手は笠状の突起と口縁上端の間が球状となってつながる。文様は口縁上端の内面と頭部に2本1組の沈線を巡らし、沈線間に細かな刻みを連続して加えている。体部上半は沈線による棹状区画内に斜位の集合沈線を交差に充填する。把手下の基部より細い隆帯が垂下し、棹状区画の一端をなす。外面は良く磨かれ光沢があり、暗褐色で焼成は良い。堀之内式ないし加曾利B式に比定される。

#### 第9類 深鉢の底部 (82~92)

第2類~第6類に含まれる深鉢底部を一括した。厚みがあるもの(82・83・85・90)と胴部にかけて反り気味に立ち上がり比較的薄いもの(84・86~92)がある。網代痕を残す土器が多い。82は完存する底部で、巨石の脇に底面を上にした状態で出土した。

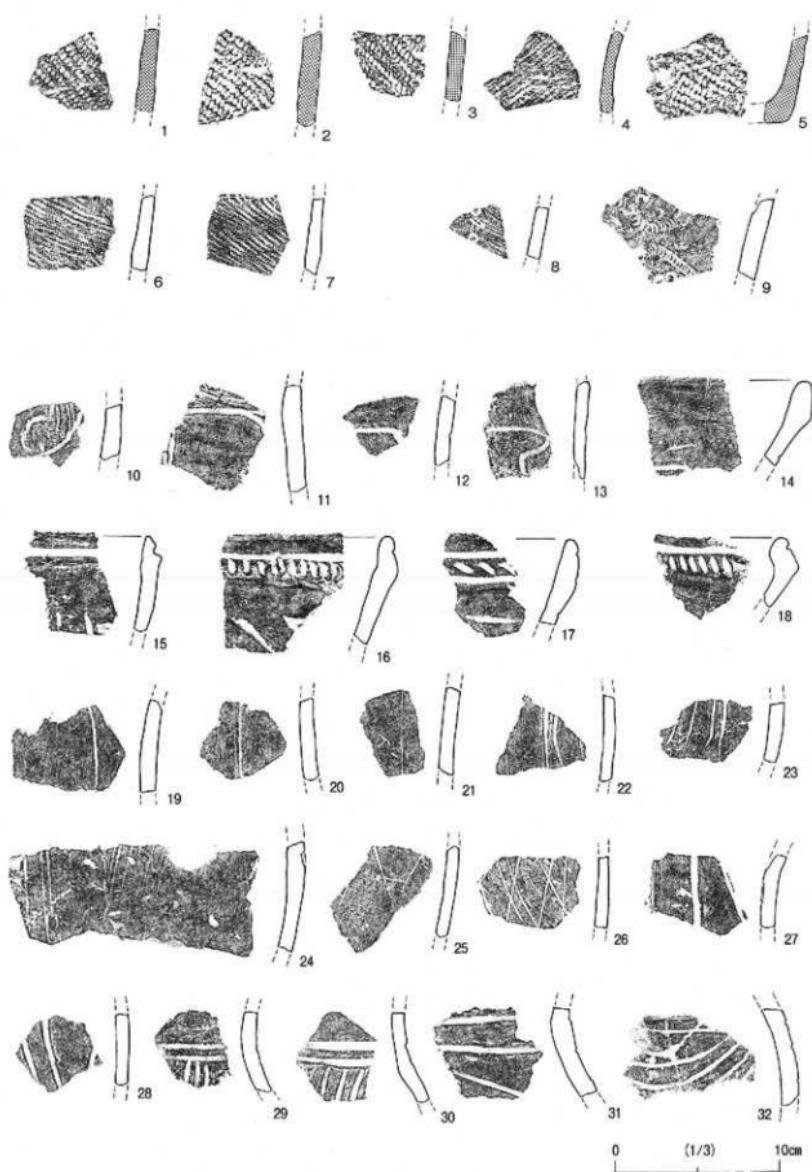
#### (3) 石器 (第9図1~5)

石器の出土数は土器に比べ極端に少ない。3・5はHトレンチ、他は本調査区の遺物包含層から出土した。

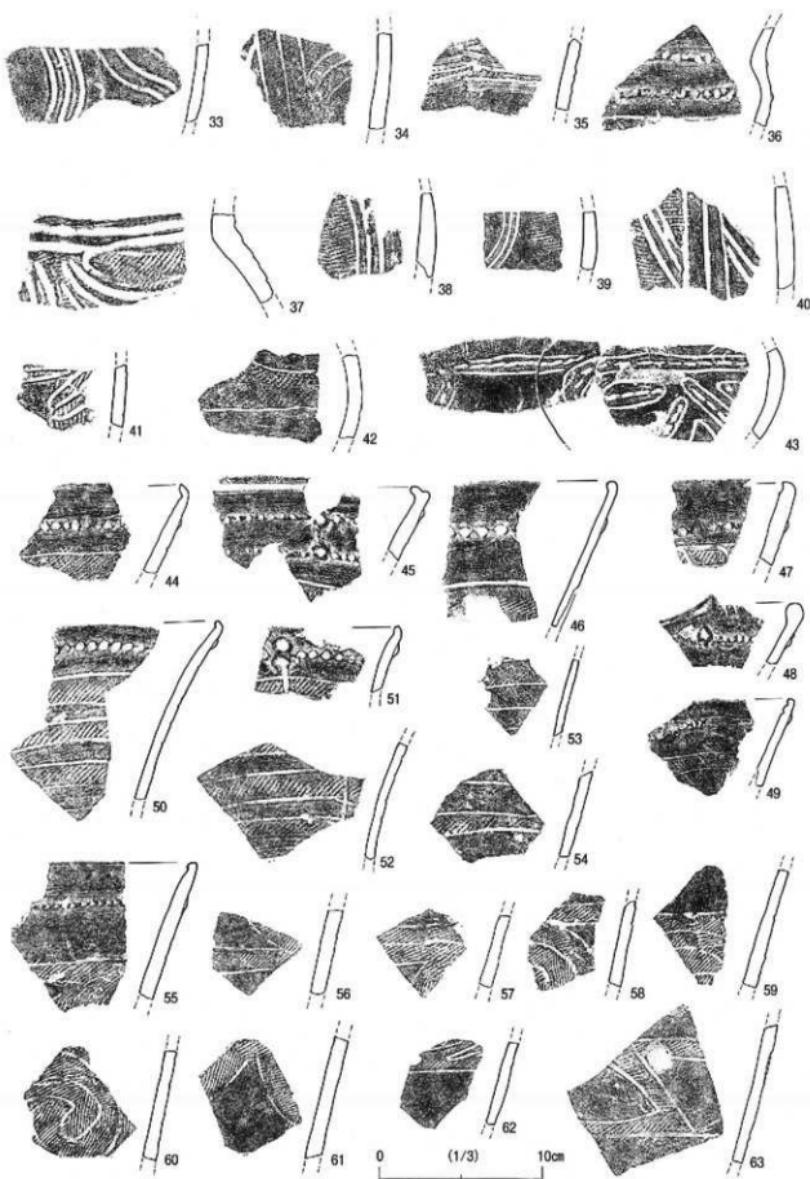
1は磨石。断面四角形で各面に細長い磨面があり、端部中央にも小さな磨面がある。長軸15.8cm・重さ430gで、石材は砂岩。

2~4は横刃形石器で、1辺に主要剥離面側から調整を加えた部としている。2は長軸8.5cm・重さ65g、3は長軸9.2cm・重さ80g、4は長軸7.5cm・重さ115g。石材はすべてホルンフェルス。

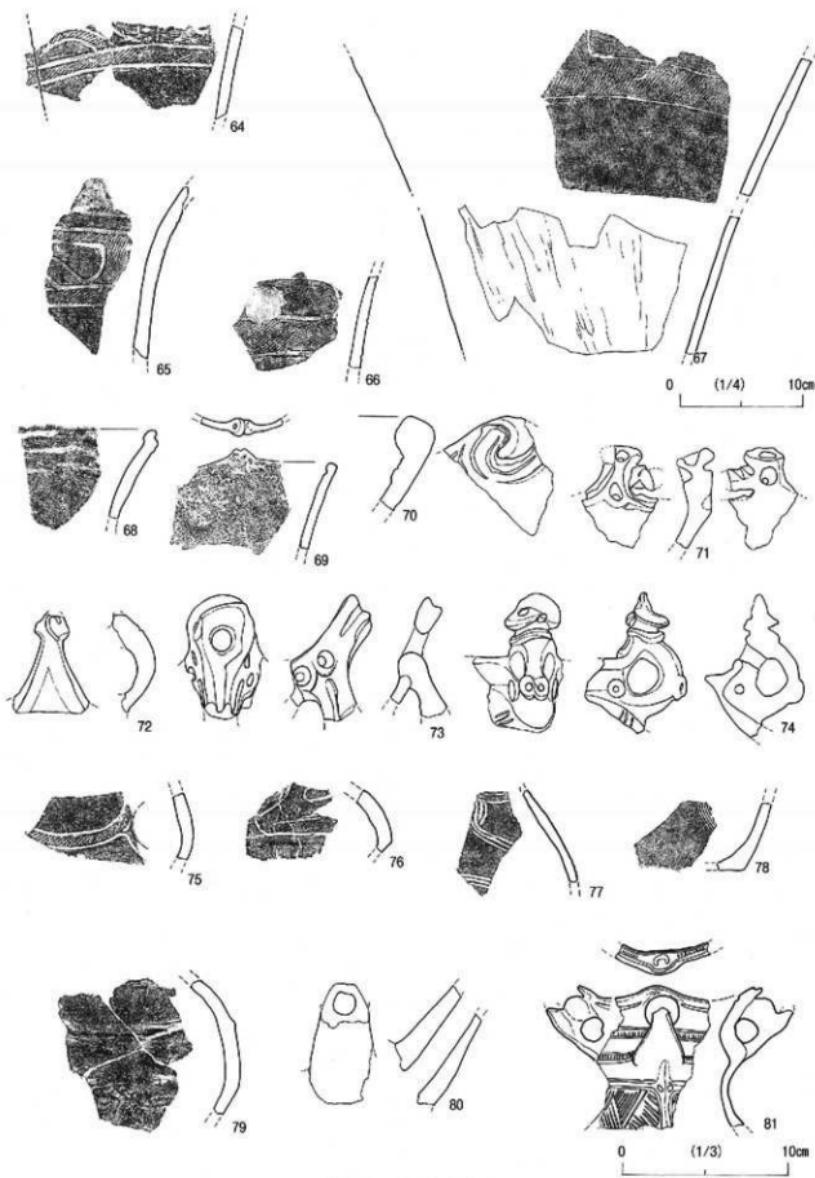
5は石錐で、扁平な自然縁の剝離両端を打ち欠く。長軸8.0cm・重さ100g。石材は粘板岩。



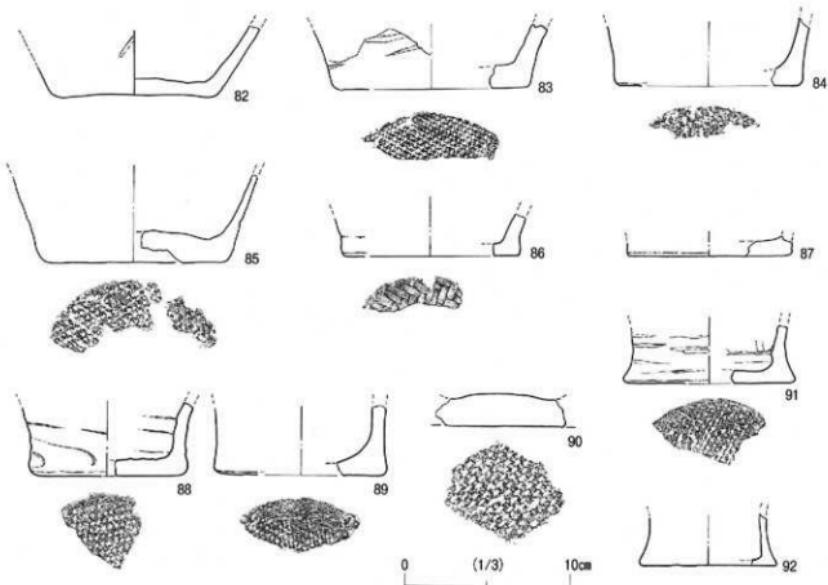
第5図 出土土器 (1)



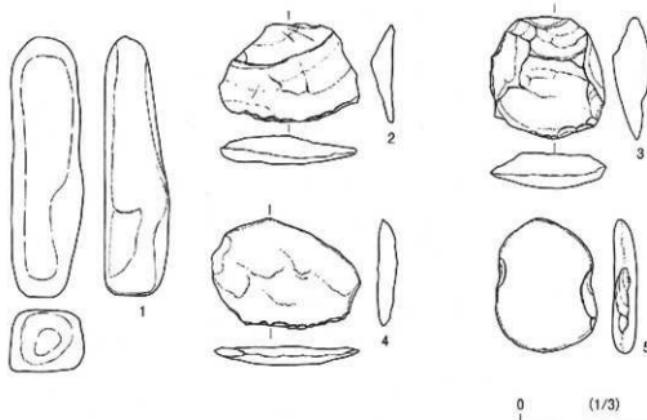
第6図 出土土器(2)



第7図 出土土器(3)



第8図 出土土器（4）



第9図 出土石器

## 第2節 古代

土師器・須恵器が若干数出土した（第10図1～6、図版4）。

1、土師器坏。2／3残存。いびつな半球形。口縁部横撫で、体部外面へラ削り、内面へラ撫で。にぶい黄褐色。焼成は良いが軟質の土器。砂粒を少量含む。口径13.0cm・器高5.5cm。

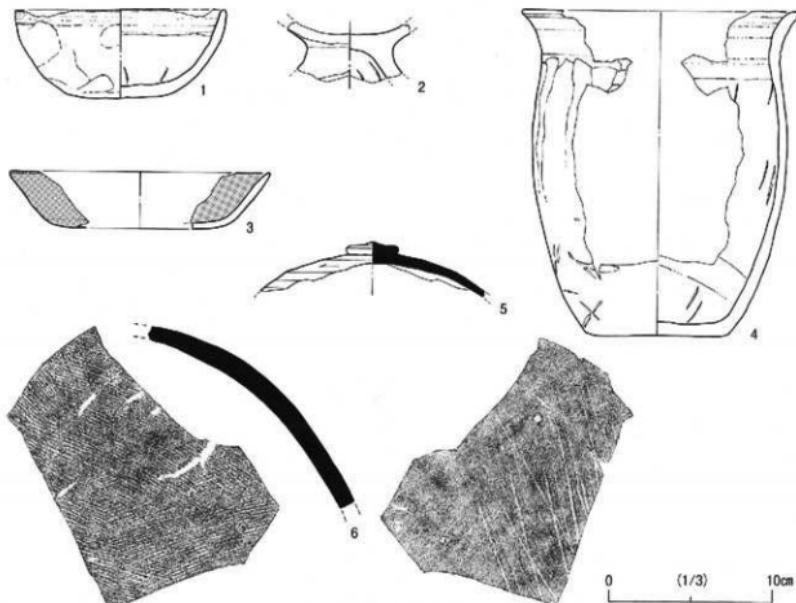
2、土師器台付甕。底部から脚台上部が残る。器面は摩滅。脚台部内面へラ撫で。橙色で焼成は良い。砂粒・金雲母を含む。

3、土師器盤状坏。体部から底部の破片。体部は直線的に開く。内外面は良く磨かれ、赤彩が施される。焼成は良い。砂粒を少量含む。推定口径16.0cm・器高3.5cm。

4、土師器甕。1／3残存。口縁部は緩く外反する。胴部の最大径は上位にある。口縁部横撫で、胴部上半は継へラ削り、内面へラ撫で。にぶい黄褐色・橙色で内外面は一部吸炭。焼成は良い。砂粒を少量含む。推定口径16.5cm・器高20.0cm・底径9.0cm。

5、須恵器坏蓋。1／5残存。つまみは偏平な擬宝珠形。ロクロ整形で天井部は回転へラ削り。灰色で焼成は良い。

6、須恵器甕。肩部の破片。平行叩き目。内面は沈線状の擦痕が多数残る。灰白色で焼成は良い。  
以上のうち1・2はBトレンチ、他は調査区の出土で、とくに4～6は繩文土器に混じり約1m範囲内にまとまって出土した。時期は、1が7世紀後半から8世紀初頭、3が8世紀前半に位置付けられ、他の土器もほぼ同時期と考えられる。



第10図 出土土器

### 第3節 巨石（第4図、図版3）

試掘調査時に確認された。確認面は第II層中。長軸2.5m、短軸1.9m、厚さ1m以上の巨大な自然礫で、遺跡内で一際目を引いた。深さは地山の砂礫層まで達し、底面を確認することはできなかった。上面は大きく裂け、地形に沿って東方向へわずかに傾く。石質は片状構造を持つ泥岩で、周囲の砂岩を主とする河原石とは異なる。

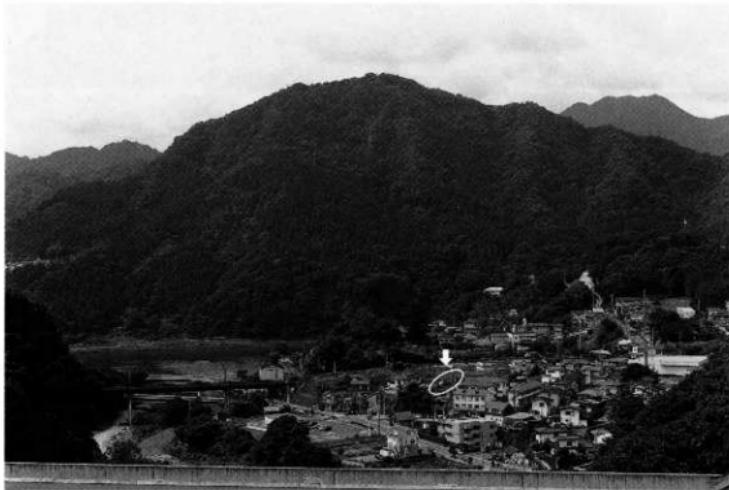
## 第IV章　まとめ

松留地区で初めて行なわれた今回の遺跡発掘調査で、縄文時代後期前半を中心とする遺物包含層や古墳時代後期から奈良時代の土師器・須恵器が検出された。

縄文時代では前期の土器を最古とするが出土量はわずかであり、後期前半の限られた時期に土器の大量廃棄や配石の構築など人々の活発な動きを捉えることができた。同時に巨石の特異な存在から、縄文人が巨石を取り巻く一定の範囲を意識して土器の廃棄や配石の構築を行なった可能性があり、この場所が巨石を信仰する祭祀的な空間であった可能性も考えられる。

古墳時代後期から奈良時代の土器はわずかな出土量であったが、松留地区で初めて発見された古代の遺物となる。時期は壺の特徴から7世紀後半から8世紀前半に位置付けられるが、この時期の遺跡は上野原地区で調査事例が増えており、関連が注目される。土師器の赤い盤状壺は南武藏、須恵器は美濃・東海地方の輸入品と考えられるが、土師器壺（第10図1）はやや粗雑で軽い作りのため在地で生産された可能性もある。

今回の調査は地区全体から見れば針穴のような点に過ぎないが、縄文時代や古代の居住地が近隣に想定され、さらに古代律令制の成立から初期段階における遺跡との関連など、調査の成果から導き出される課題は上野原市域の歴史を探る上でも重要と言える。



遺跡遠景（北対岸の内城館跡より）



調査前（南西から）

図版2



調査地近景（北東から）



配石（北西から）

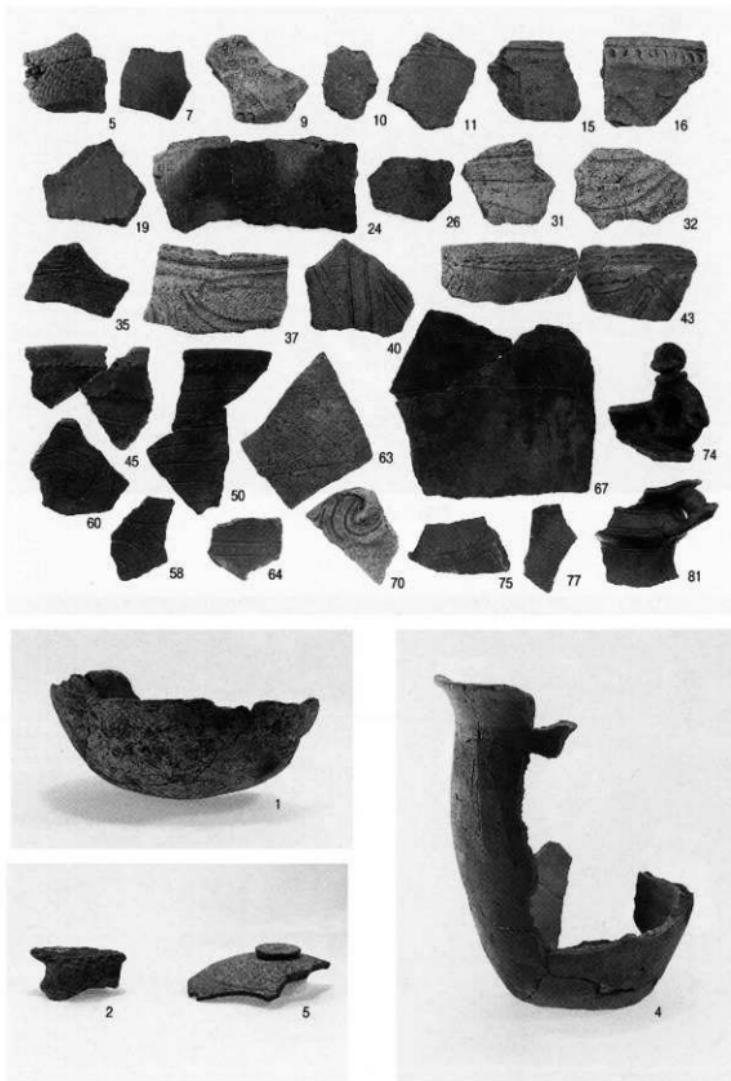


巨石近景（南西から）



調査風景

図版 4



出土遺物

(上段：縄文土器、下段：土師器・須恵器)

## 報告書概要

フリガナ	マツドメヤカタアト	
書名	松留館跡	
副題	(仮称) 上野原松留宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ	上野原市埋蔵文化財調査報告書第4集	
著者名	小西直樹	
発行者	上野原市教育委員会	
編集機関	上野原市教育委員会	
住所・電話	〒409-0192 山梨県上野原市上野原3832 電話0554-62-3409	
印刷所	鬼灯書籍株式会社	
発行日	平成22年(2010)2月26日	
松留館跡遺跡	所在地	山梨県上野原市松留261番地
	地図名・位置・標高	1/25000上野原 北緯35°37'11" 東経139°6'32" 標高190m
概要	主な時代	縄文、古墳～奈良時代
	主な遺構	配石
	主な遺物	縄文土器、石器、土師器、須恵器
	調査期間	平成21年(2009)7月15日～7月31日

---

上野原市埋蔵文化財調査報告書 第4集

## 松留館跡

平成22年(2010)2月26日発行

編集・発行 上野原市教育委員会

---

